

討 論

「知の集積と共有」の変革期に"じんもんこん"がなし得ること

後藤真¹ 永崎研宣²

1 花園大学 2 山口県立大学情報化推進室

小特集「「知の集積と共有」の変革期に"じんもんこん"がなし得ること」を企画した。本小特集では、今までに「人文科学とコンピュータ研究会」が築いてきた研究の蓄積の再確認と、研究環境の変化などについての検討を行うことを目的とする。「人文科学とコンピュータ」と呼ばれる研究領域が明確なものとなって、20年経過した。その間に、インターネットの普及、爆発的なコンピュータ技術の進歩とともに、この研究会は歩いてきた。同時に、人文科学の研究状況も、社会の変容とともに大きく変遷しつつある。そこで、研究会を「歴史」として振り返ることになり、人文科学の変容を身に激しく受けながら進まざるを得ない世代の研究者として、いくつかの議論提起を試みてみたい。世代を超えた議論の先に、新たな地平を見出すことを期待する。

Possibility of "SIG Computers and the Humanities" in Change period of "common and accumulate knowledge"

Makoto GOTO¹ Kiyonori NAGASAKI²

1 HANAZONO University 2 Yamaguchi Prefectural University

We planned a small special feature. We reaffirm the accumulation of the study that "SIG Computers and the Humanities" built so far. And we perform the examination about changes of the study environment. We are aimed for these both examination.

ここでは、若干漠としているが、討論のためのいくつかの論点を掲げておく。

1. 標準化と差異化。標準化のメリットと、デメリットを踏まえた上で、「人文科学とコンピュータ」という研究は、どのような方向性を持つべきなのか。
2. 分野の偏りの原因。特に、民俗・社会学・日本史でも聞き取りなどの「調査・収集型」の資料に対する研究が少ない。また、資料に対するものは多いが、研究史や方法論に踏み込んだものは多くない。その原因はなんなのか、解決すべきなのか。
3. 技術的課題。技術研究の圧倒的な進歩についていけない人文科学研究者の実態に対し、情報学系研究者のメリットをどのように維持すべきか。特にデータベース・データ自体の保存・活用・継承のしくみについては、私は情報学系研究者に期待したい。

以上のような論点を、事例も挙げつつ検討できれば幸いである。(文責・後藤)